

令和 2 年 6 月 5 日現在

機関番号：22604

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2019

課題番号：16K15876

研究課題名（和文）積極的/能動的な参加を目指したBespoke Nursing Systemの開発

研究課題名（英文）Development of Bespoke Nursing System aiming for active/active participation

研究代表者

野村 亜由美（NOMURA, AYUMI）

首都大学東京・人間健康科学研究科・准教授

研究者番号：50346938

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：患者が入院/加療目的で入院先を決定する際の判断基準は、医師の専門性や治療実績、病院までのアクセスの良さや病院の規模等であり、看護の特性や看護の質を判断基準として選択する機会は少ない。その理由として1)看護の質を評価するための情報源や指標が少ないこと。利用者側が治療において2)「看護の質」がどれほど有用であるかを判断することは困難であることがあげられる。医療技術の高さが第一選択となることは必然であるとしても、利用者が治療に対して「積極的/能動的に参加できる看護」を享受できる取り組み - “Bespoke Nursing System”（Benus - を構築するために、更なる研究の深化が必要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

高齢化の更なる進展と人口減少という人口構造の変化・生活習慣病や多疾患などの慢性化/複雑化に伴う疾病構造の大幅な変化・そして、それらに伴う保健医療のニーズの増加と価値観の多様化は、看護を必要とする人びとの権利意識への高まりへと繋がっている。看護が個別性に応じたケアを提供したいと望む一方、システム化・効率化に偏重しがちな現代医療においては、患者のニーズに即した看護を十分に提供しているとは言い難い。看護が果たすべき機能と役割、実現すべき患者との価値共有、看護実践の基盤としての存在感を高めるために、看護者が大切にしているそれぞれの「看護観」を患者に見える形で具現化する意義は大きく、学術的価値も高い。

研究成果の概要（英文）：When a patient decides the hospitalization destination for the purpose of hospitalization/treatment, the doctor's specialty, treatment record, accessibility to the hospital, scale of the hospital, etc. are the criteria. Therefore, there are few opportunities for users to select the characteristics and quality of nursing as a criterion. The reasons are: 1) There are few information sources and indicators for evaluating the quality of nursing. It can be said that it is difficult for the user side to judge how useful 2) "nursing quality" is in the treatment. Inevitably, high medical technology will be the first choice. However, efforts (“Bespoke Nursing System” (Benus)) in which beneficiaries of medical treatment can enjoy “nursing that allows active/active participation in treatment” are unavoidable, and further deepening of research is needed in the future.

研究分野：基礎看護学

キーワード：Bespoke Nursing System

## 1. 研究開始当初の背景

2015年9月、厚生労働省は「平成26年受療行動調査(概数)」の結果を発表した。発表によると病院に対する全体的な満足度で「非常に満足している」「やや満足している」と答えた人は入院患者66.7%で、1996年の超過開始以来最高ポイントとなった<sup>1)</sup>。質問項目は「医師による診療・治療内容」「医師との対話」「医師以外の病院スタッフの対応」「病室でのプライバシー保護の対応」「病室・浴室・トイレなど」「食事の内容」の6つである。おそらく看護師に対する患者評価は「医師以外の病院スタッフの対応」に含まれていると予想されるが、回答者が看護師のどのような医療行為や対応に満足したのかは明らかにされていない。

看護教育に目を転じてみると、1992年に施行された「看護婦等の人材確保の促進に関する法律」により、看護系大学・大学院の整備の充実が盛り込まれ、1990年代以降、学部教育に至っては過去20年ほどの間に10倍もの伸びを示している(2015年8月時点で、看護系大学は全国で249校、このうち修士課程は149校、博士後期課程75校を設置)<sup>2)</sup>。また同時代以降、インフォームドコンセントや自己決定権、患者アドボカシーなど、患者が求める医療に対する関心が高まるにつれ、それらに呼応する形で患者の医療に対する意識を明らかにする研究も数多く散見される<sup>3)</sup>。しかし本研究のように患者の視点で自らの「看護」を多角的に評価するという研究はほとんどない。

## 2. 研究の目的

患者が入院/加療目的で入院先を決定する際の判断基準は、医師の専門性や治療実績(手術件数、予後)、自宅から病院までの距離や病院の規模等であり、看護の特性や看護の質を判断基準に選択される機会は少ない<sup>1)</sup>。患者が病院選びの判断基準として「看護」を考慮しないのは、看護に関する公開情報が解りにくい、もしくは患者が知りたい情報が適切に開示されていないことが原因だと考える。そこで本研究では、1)看護専門職者が考える「病院選択の際の看護の視点」について考察し、2)病気の予防から治療まで、患者のニーズに応じた看護を提供するための「情報公開」の在り方について検討した後、3)患者が治療に「積極的/能動的に参加できる看護」を目指した“\*Bespoke Nursing System”(Benus = ビーナス)を開発することを目的とした。( \*Bespoke とは「話しを聴かれながら = *be spoke*」 “あつらえる”という意味で、患者に合わせた看護の提供を指す。)

本研究では患者の視点で自らの「看護」を多角的に評価し、患者の病院選びの判断指標となり得る「看護」の特性を専門家の立場から提示できるよう、以下の3点を研究期間に明らかにすることを目的とした。

- 1) 看護専門職者が考える「病院選択の際の看護の視点」
- 2) 患者のニーズに応じた看護を提供するための「情報公開」の実態調査
- 3) 医療への積極的/能動的な参加を目指した“Bespoke Nursing System”(Benus)開発

## 3. 研究の方法

初年度は、入院先や通院先の病院を選ぶとき、医療専門職者は何を基準に、あるいはどの

ように病院を選ぶのか？をテーマに、看護科学学会で交流集会を行った。交流集会にあたって、看護の質を評価する国内外の評価基準を紹介し、看護師が自らの「看護」を多角的に評価することを通して、患者が治療に積極かつ能動的に参加できる看護を目指したシステムが必要ではないかと問題提起を行った。さらに研究代表者らは、日本国内外の看護教育制度の違いに関する文献レビュー、EPA (Economic Partnership Agreement) で来日した研修生 (母国では看護師として勤務) の視点からみた日本の看護教育、看護職者の役割の違いについて検討した。また BeNUR システム構築に向けた情報収集では、現役看護師が選ぶ病院の基準として、ハード面では「自宅からの距離」「病院の新しさ」「外来の構造や雰囲気」などがあげられ、HP から得たい情報として「医師や病院の専門性」「手術件数・治癒率」「地域連携の有無」「多職種連携の有無」「病院機能評価」「病棟紹介」「看護師長の紹介文」など、看護師に求める資質について「専門看護師」「研修制度の充実」「看護研究に関する業績」「大卒看護師の割合」「疾患別ケアの一例」などがあげられた。さらに HP などでは得にくい情報として「ベッドサイドの滞在平均時間」「スタッフの平均年齢と男女比」「電話対応」「身だしなみ」「接遇研修」「笑顔・優しさ」「看護師の勤続年数」「看護師の残業時間」「離職率」等があることがわかった。また看護の質に関する文献は、近年外来看護に関するものが多く、これは病院完結型医療から地域完結型医療への転換に伴う患者ニーズへの対応を示していることが明らかとなった。看護の質を患者の視点で考える際には入院中のみならず、入院前から退院後までを介護施設や訪問診療・看護との連携を含め評価していく必要があると示唆した。さらに初年度は、“Bespoke Nursing System” (Benus = ビーナス) 開発に向けて商標登録を行い、特許権を得た。

次年度と最終年度は、文献検討のほか、看護師の家族が入院・加療した際に経験した医療者の言動に焦点を当てた。これまではどこで治療を受けたいかという選択の基準として、家からのアクセスのしやすさ、疾患に関する専門性の高さ、治療や手術に関する情報、平均在院日数、医療スタッフの人員配置、地域包括支援センターとの連携などが基準となっていることが明らかになっており、これらは被専門職者にもわかりやすい判断基準となっている。一方で、医療専門職者からみた基準としては、外来受診から入院までのスムーズな連携などのソフト面のほか、勤務交代時の引継ぎの内容の正確さ、多職種間の連携の様子 (特に看護師 - 医師 - 薬剤師など)、家族の援助が得られないときのフォロー、食事内容、買い物のしやすさなど、より日常生活に密着した「生活の場」としての満足度を高める要因があることが分かった。さらに専門職者の視点として、病室内の環境整備、トイレの位置、空調管理、病院内における感染管理の徹底、外来から検査室、病室から検査室までの移動のしやすさなどのハード面において関心が高まる傾向があることがわかった。

#### 4. 研究成果

患者が入院や加療目的で入院先を決定する際の判断基準は、医師の専門性や治療実績 (手術件数、予後)、自宅から病院までの距離や病院の規模等であり、看護の特性や看護の質を判断基準に選択される機会は少ない。患者が病院選びの判断基準として「看護」を考慮しないのは、1) 看護に関する公開情報が解りにくいか、もしくは、2) 患者が知りたい情報が適切に開示されていないことが原因だと考えた。

利用者は、病院選びの判断基準として病院の規模 (大学病院志向)、専門医の有無、自宅からの距離などが主であり、それらを統合した結果さらにいくつか候補となる病院をあげ、

口コミサイトや知人の紹介などを併用することが明らかとなった。しかし、口コミサイトや知人からの情報などは信ぴょう性が乏しく、利用者自身の個人的な主観に偏りが見られるため参考程度の情報に留まっていた。また、病院選びに「看護の質」を重視するかという点においては、現時点においてもそれらを評価するための情報源が乏しく、看護の質が自身の病気治療にどのように有効であるかの見極めは極めて困難な状況であることがわかった<sup>4) 5) 6)</sup>。

医療を受ける際に医療技術の高さが第一選択となることは必然であるとしても、医療の受益者が治療に対して「積極的/能動的に参加できる看護」を享受できる取り組みを構築することは不可避であると考える。本研究期間中に、患者が治療に「積極的/能動的に参加できる看護」を目指した“Bespoke Nursing System”のサイトを構築するまでには至らなかったが、その足掛かりとなる要素については抽出できたと考える。今後“Bespoke Nursing System” (Benus) を構築するための更なる研究の深化が必要である。

#### 参考文献

- 1) 平成 27 年度第 8 回入院医療等の調査  
<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000097742.html> (2015/10/24)
- 2) 自民党看護問題小委員会への要望書。日本看護系大学協議会。H270828FormalRuq - JANPU (2015/10/19)
- 3) 古川直美他 (2012)。看護師の援助に対する入院患者の満足度を測定する用具 (尺度) の開発。岐阜県立看護大学共同研究報告書, 33-38。
- 4) 和田ちひろ (2003)。ナースがつくる患者に選ばれる病院 from こんな病院あったらいいな。日本看護協会出版会
- 5) 和田ちひろ, 武藤正樹, 平原憲道 (2001)。みんなの「こんな病院あったらいいな」が実現する本。日総研出版
- 6) 塩飽哲生 (2014)。病院選びの前に必ず読む本 知らないと損する / 病院探し助かる人ほど病院はデータで決める。クロスメディア・マーケティング(インプレス)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 野村亜由美, 石川陽子, 習田明裕
2. 発表標題 積極的/能動的な参加を目指したBespoke Nursing System ( BeNUR ) の開発
3. 学会等名 第36回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 松野史, 橋田知未, 長友祝子, 野村亜由美
2. 発表標題 施設で終末期を迎えるがん患者のその人らしさに関する研究
3. 学会等名 第26回日本保健科学学会学術集会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 前田耕助, 野村亜由美, 三輪聖恵, 習田明裕
2. 発表標題 自作動画を用いた振り返り学習法の検討 - ウェブサイトによる視聴の試み -
3. 学会等名 第26回日本保健科学学会学術集会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 習田明裕, 田中純子監修	4. 発行年 2016年
2. 出版社 メディカ出版	5. 総ページ数 Web教材のため不明
3. 書名 CandY Link - 実践が変わる！臨床看護のeラーニング	

〔出願〕 計0件

〔取得〕 計1件

産業財産権の名称 BeNUR	発明者 野村亜由美	権利者 公立大学法人首都大学東京
産業財産権の種類、番号 特許、5916447	取得年 2017年	国内・外国の別 国内

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	石川 陽子  (Ishikawa Yoko)  (40453039)	首都大学東京・人間健康科学研究科・准教授   (22604)	
研究分担者	N・P CHANDRASIRI  (N.P CHANDRASIRI)  (90725657)	工学院大学・情報学部(情報工学部)・教授   (32613)	
研究分担者	習田 明裕  (Shuda Akihiro)  (60315760)	首都大学東京・人間健康科学研究科・教授   (22604)	